



土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

No. 8 1998.4.

目次	見出し / 執筆者	掲載頁
土木史ニュース	徳川時代の江戸上屋敷下水遺構発見	堀江 興 1
フォーラム	利他行と土木	長尾 義三 2
地域のニュース	土佐の厳しい風土に生きるまち	3
	河頭太鼓橋をめぐる複合遺跡の発見と破壊	3
	イギリスの橋を訪ねて	星笠 正明 4
海外土木史	大阪府柏原市周辺の鉄道遺産見学会	5
関連学会ニュース	土木史研究委員会報告	5
学会の動き	第18回土木史研究発表会の開催	6
	第18回土木史研究発表会のプログラム	
行楽案内	第五回 河村瑞賢墳墓平成保存会会合	8
土木史関係図書	技術官僚の政治参画	8

土木史ニュース

徳川時代の江戸上屋敷下水遺構発見

東京都下水道局は平成8年3月、東京都新宿区荒木町内の雨水浸水排除を目的として流下能力増強をはかるため、バイパス管布設シールド工事（内径1350mm）に着手した。この工事にあたって、既設の管渠との交差部について調査をしたところ、徳川時代の下水石樋暗渠が発見された。工事現場は、東西方向に南側を甲州街道、北側を靖国通りが通っており、さらに外苑東通りが南西から北東方向に走る交通の要衝の近くに位置している。

本箇所の調査によって、次のような事実が明らかにされた。すなわち、今を去る318年前にあたる1680（延宝8）年に徳川綱吉が第五代将軍の地位に就いた頃、美濃高須藩松平攝津守義比の上屋敷としてあてがわれたもので、松平が転居にあたって遊水地を含む敷地内整備の一環として、石積み暗渠を築造させたと推定されるものである。

当該地は地形上周辺部とは9～10mの高低差があり、くぼ地を形成していた。またこの地は徳川家康が鷹狩りの時に使ったムチを洗ったことから「策（ムチ）の池」と呼ばれたところでもあった。この上屋敷につくられた遺構の石積み暗渠は、内法が0.9×0.6×50.4mあり、材質は安山岩である。このことは、伊豆から運ばれ江戸城の石積みに使われた材質と同じであることを物語っており、しかも石積み技術そのものも江戸城とまったく同じであることを示している。この暗渠は、当時池の排水のために使用していたことも判明した。本遺構は、図に示すように、精緻に建設され、1個あたり900kgくらいの重さのある石も使われ、今日まで漏水や土砂の堆積もなく速やかに水が流れていたことから、当時の土木技術が優れて

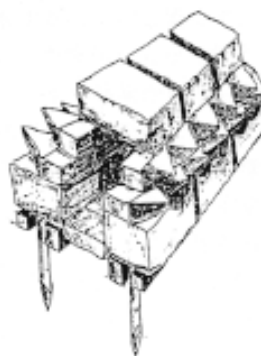
いた証拠ともなるのである（九州から土木技術者が招かれたのではないかと類推もされている）。

新宿区教育委員会は、平成9年9月、この遺構を「松平攝津守屋敷跡下水暗渠」として、埋蔵文化財に指定した（新宿区No.102遺跡）。

東京都下水道局は暗渠として使用されている石および木材について、さらに綿密な科学分析を行い、正確な築造時期を確定するための調査を進めている。さらに下水道局は「文化的資産保存検討委員会」を発足させ、近代遺産の保存・保護に力を入れていくことにしており、今回発見された遺構の一部は新宿区内落合下水処理場に移転し、保存と展示を行うことにしている。

本記事のとりまとめにあたっては、東京都下水道局管路建設部長谷口尚弘氏から、資料提供と助言をいただいた。ここに深謝する。

（新潟工科大学 堀江 興）



石積み立体図



石積み断面図

利他行と土木

長尾 義三（京都大学名誉教授）



大規模な土木事業の発端を見ると、神殿造り、仏塔、そして、権力者自らのお墓の建造が目立ちます。また万里の長城や、馳道、ローマに通じる道や各地の水道、また大運河もあります。これらは、民の幸せというより、一国の権威の象徴、軍事的な権力の表徴と見ることができます。しかし世界遺産として、また観光資源として後世に残されているものも多い。

こうしたものと、わが国の大規模土木事業の発生を比較すると、河内や大和の古墳群や、藤原京、平城京、そして平安京また大仏殿や地方の国分寺造営も、国土統一の一環として行われたのでしょうが、もう一つ、行基や空海等の僧によって地方土木事業が民衆の手で行われたことに注目する必要があるでしょう。

今はこうした事業は少なく、近代の土木事業は、国地方を問わず国民のニーズを基調に社会の豊かさを求めて、為政者が行うようになっています。もっとも鉄道やダムのように企業として行われるものも少なくありません。

合理的で一見結構なことなのですが落とし穴もあるようです。

権力擁護や、自己、地域もしくは一国だけの利益に「公共の福祉のため」という美名が悪用されてしまうこともあることです。

日本に入ってきた仏教も当初過激だったようです。同じようなことが明治維新のときにもあったようです。文化の革命です。不思議なことに、日本では、従来有るものと、新しく生まれたものがやがて融合して一緒になり、同化して新しい秩序を生み出して行きます。珍しい、大切な国民性の持ち主と思います。

さて、行基や空海はどのようにして、仏教を国民の間に浸透させて行ったのでしょうか。

当時の日本は、隋や唐の律令制を取り入れることに懸命でした。ところが公地公民を基調とするこの制は合理的でも人間の本质と合わなかったの

でしょう。自分で開墾したものは自分の土地とする事ができる三世一身の法（723）や墾田永世私財法（743）に変えざるを得なかったのです。一時私有を禁止することもありましたが、やがて斑田制も廃止（772）されることになります。しかし、開墾と言っても、灌漑・排水路・溜池・堰堤・道路・橋などを整備しなければなりません。社寺や貴族・豪族など力有るものしかできません。これでは、国がそれらに変わっただけで変革になりません。こうした律令国家崩壊の過程の中で「自分で汗を流して皆のために尽くせばそれが成仏への道であり現世に利得もえられる」と慈悲の心を教え、技術の指導にも当たりました。豊かさを得て人々は仏を信じるようになったといえます。もっともこのため私有地がこの国では今でも多いといわれます。

利他行を先行し、後で現世利得を得た商人もいます。角倉了以親子です。難渋する交通を解決するため、水運、運河の開削を願い出で、関係住民と協力して、現在にも残る保津川、高瀬川運河を造りました。マイナスを蒙った住民には舟運業に従事させ、得た利得を逆に幕府に冥加金として献上して、皆から喜ばれたといえます。

こうした、日本独特の土木事業のあり方の新鮮さを土木史はいろいろと教えてくれます。残された土木遺産にその時代を切り開いた先人の想いを感知することが必要です。また、国土は誰のものといった究明ももっと行う必要があります。

今、土木事業がいろいろと問われています。己の利得、目の先のことが先行しているようです。社会を、国を、そして地球をもっともっとよくするために、すみ易く、子孫によい空間環境を造って引き継ぐために、皆が何をすればよいか。利他行の中に、結果として自らの現世利得を得る道は、もう終わりどころかまだまだ沢山有るのではないのでしょうか。

地 域 の ニ ュ ー ス

土佐の厳しい風土に生きるまち—高知県室戸市吉良川町^{きらがわ}、重伝建地区に選定—

何となくほっとする。吉良川町を訪れたときの感想である。町中には昔ながらの白壁の家々が軒を連ね、人々が日々の暮らしを営んでいる。いわゆる観光地的な町並みではなく、それが安堵感を懐かせるのであろう。

吉良川町は昨年10月、文化庁により重要伝統的建造物群保存地区に選定された。室戸岬の北西約10kmに位置し、明治中期から昭和にかけて土佐備長炭と回船業で栄えた町である。選定されたのは同町の約18.3haの地区で、指定物件は明治末期から大正時代に造られた165点である。町並みは主として2つの地区から構成されている。海に近い旧街道沿いの「浜地区」には、「水切瓦^{みずきりがわら}（雨から壁面を守るために庇状に瓦を並べたもの）」を幾重にも取り付けた土佐漆喰壁の切妻造りで軒を低くしたしつらいの商家が連なる。一方、山手の「丘地区」には藩政期の地割りが残り、民家が整然と並んでいる。その家々を囲む路地の両側には「いしぐろ」と呼ばれる独特な石垣が見られる。河原石や浜石を半割りにして積み上げたものであるが、家によって独自の積み方がある。いずれの建造物も、高温多湿で多雨、台風が常襲する土佐の厳しい風土に耐えるよう工夫されたものであり、当地独特の情緒を醸し出している。

当初、この町並みの価値に住民は気づいていなかった。しかし、外部の研究者や専門家によって調査研究が進められ、町並み保全に関する勉強会やかかわら版の発行などがなされるにつれ、多くの住民も関心を持つようになった。今では住民達が主体的にまちづくりに取り組んでいる。先人達が遺した文化的要素を保全しつつ新たな時代に対応させることがまちづくりの基本方針である。歴史的文化的の保全と自動車交通や観光振興などの現代社会的生活とが共生した地域社会の実現は、現代人が後世に遺すべき事業なのであろう。

（高知工科大学 轟朝幸）



まちの中心に鎮座する御田（おんだ）八幡宮に続く道
水切瓦のある漆喰壁の家々が建ち並ぶ（撮影：砂本文彦氏）

こがしら
河頭太鼓橋をめぐる複合遺跡の発見とその後

いま鹿児島市では、甲突川にかかる最後の石橋、河頭太鼓橋の撤去工事がおこなわれている。

五大石橋の撤去問題で、あまり注目されていなかったが、河頭太鼓橋も肥後の名工岩永三五郎が設計した橋として知られる。五大石橋がなくなった現在、市内に残る岩永三五郎が関係した唯一の橋であり、スパンの大きさでは、五大石橋のどの橋よりも大きい。

「河頭」という地名自体、興味深い。ここでは、兩岸の地盤を生かして甲突川の川幅を狭くし、手前でカーブする河道を利用して突き当たり大きな遊水地をつくっている。最近判明した史実によれば、この河道は山を削ってつくられた切り通しで、ここで下流に流れる水量を調節していたのである。

昨年の7月、「こがしら太鼓橋フェスティバル」がおこなわれたときのことだ。河原で川遊びをしていた実行委員の西村輝子さんたちは、河頭太鼓橋の上流約40mの右岸に小さな洞窟を発見した。

その後の調査で洞窟は二つあり、ひとつは川と直角に20m、もうひとつは川と併行に40mのびていることが判明した。壁には手掘りのノミ跡もみ

られた。

わたしも現地によばれ、コメントを求められた。まず二つの隧道は、形態・表面仕上げ・ルートのあり方がちがうので、それぞれ別の時期につくられたと思える。直角ルートは、安永5（1776）年の川直御新田のとき、併行ルートは河頭太鼓橋と同時期と考えた。隧道の用途や目的は、直角ルートが水田の排水路、併行ルートはふだんは用水用、洪水のときは余水吐機能も担ったと推測できる。

以上から河頭太鼓橋地区は、江戸時代の治水・利水技術がひじょうにコンパクトにまとまった複合遺産のこの貴重な場所であり、全国的にみてもあまり類例がないと位置づけた。地域のオープン・エア・ミュージアム（屋外博物館）として整備することで、またとない環境学習の場になると考えられる。

県当局は、隧道測量をおこない、地元や専門家（わたしをふくめ5人）にもヒアリング調査をしたが、「保存する価値なし」として市民からの保存陳情を不採択にした。

（日本大学 伊東孝）

イギリスの橋を訪ねて

昨年の夏、イギリスの橋を見て回る機会があった。

まず、テムズ川の下流に架かる斜張橋、ダートフォード橋（1988年）を見た。ロンドン市内への帰途、タワーブリッジに立ち寄った。既に、竣工から100年を超える歳月が経過しているが、現在も車の通行に供されているのは立派である。また、観光名所として多くの観光客を惹きつけているのは周知の通りである。

ロンドンを後にしてレンタカーで西へ向かった。最初の目的地は橋ではなく、ストーンヘンジである。今から5000年も前にこのような巨大な石を用いた建造物が構築されたというのはやはり驚きである。

更に西に向かい、ブルネルの代表作である、ロイヤル・アルバート橋（1859年）を訪れた。鉄道橋で、現在も使用されている。近くの高台から、また、橋の下からこの巨大な構造物をゆっくりと見てきた。次は、北東に方向を変え、同じくブルネルの代表作であるクリフトンの吊橋（1864年）へと向かった。重量制限はあるものの20ペンスの通行料で利用されている。夕食をとりながら、照明により輪郭の浮かび上がった橋の夜景を十分に堪能した。

翌日は、セヴァーン川に架かる吊橋（1966年）と斜張橋（1996年）をまず訪れた。次に、近くのチェpstowに行き、ワイ川に架かる、1816年竣工の5径間の鑄鉄アーチ橋を見た。主要道路からはずれてはいるが、今なお車の通行に供されている。続いて、セヴァーン川沿いに北上し、テュークスベリで鑄鉄製のアーチ橋の一つ見た後、コールポート橋（1818年、鑄鉄アーチ橋）へ向かった。到着したときは、既に夕方になっていたが、周辺の川辺で人々が夕涼みをしていたのが印象に残っている。この橋も今なお現役である。次に、2km程上流に位置する、世界最古の鉄橋として名高いアイアンブリッジ（1779年）を訪ねた。夕刻で、しかも、雨模様であったが、橋の周辺に設けられた散策路を通して、いろいろな角度から橋を眺めてきた。

翌日は驟雨の中を北上しカウンドへ向かった。ここに小川に架かる1797年竣工の、充腹アーチを主構造とする鑄鉄橋がある。小規模な橋ではあるが、現在も自動車交通に供されている。北上を続け、テルフォードの手になる、1805年完成のポンテセシルト運河橋に向かった。高さ40mに達する石造橋脚の上に、全長303mの19径間鑄鉄製充腹アーチが架かっている。その上にこれも鑄鉄製の溝型水路が設けられている。今から200年も前にこのような巨大な構造物が建造されていたというのはや

はり驚きである。観光用あるいは自家用の簡単な船が、運河を行き来しており、一方通行ではあるが、この運河橋も現在なお現役としてその使命を果たしている。

翌日は、ブリタニア橋を通りアングルーシ島へ渡った。この橋は、もともとはロバート・スティューヴンソンによって1850年に架けられた、鍊鉄製の鉄道箱桁橋であるが、1970年に火災により桁は焼失し、その後アーチ橋に改造された。現在は鉄道・道路併用橋としてなお使用されているのであるが、橋脚の上に聳え立つ塔が当時の面影を残すに過ぎない。続いて、至近距離にあるメナイ吊橋（1826年）へ向かった。この橋は、テルフォードの手になるものであるが、1940年に改造が行われ、ケーブルを始めとしてかなりの部材が更新されている。

その後コンウィへ行った。ここには、テルフォードによる吊橋（1826年）とスティューヴンソンによる鉄道箱桁橋（1847年）が、平行に古城と対峙して河口に架かっている。後者は今なお使用されているが、前者は現役を引退し、現在では観光客がこの橋の上を散策している。

ハンバー吊橋（1981年）を見学すべく、次の日は西海岸から東海岸へと横断した。その後、ストラトフォードでシェークスピアの生家に寄って、ロンドンに戻った。レンタカーによる6日間、1700km程の橋巡りの旅であった。

歴史的な名橋を多く見てきたわけであるが、現在もなお交通に利用されているものがかなりあった。橋梁を専門とする者にとっては、先人の偉業に触れる機会が残されているというのは幸いなことである。

一方、最新の橋梁技術を駆使した吊橋、斜張橋もいくつか見てきた。過去の遺産を保存し、活用しながら、新しいものにも積極的に挑戦するという姿勢が感じられ、興味深い旅であった。

（日本大学 星埜正明）



クリフトンの吊橋にて

 関 連 学 会 ニ ュ ー ス

大阪府柏原市周辺の鉄道遺産見学会

鉄道史学会（会長：星野誉夫・武蔵大学教授、会員約200名）では、去る3月16日（日）、23名の参加のもとに大阪府柏原市周辺の鉄道遺産の見学会を実施した。

柏原市周辺には、大阪鉄道として敷設された関西本線をはじめ、近畿日本鉄道では最も古い路線である道明寺線（旧・河陽鉄道）があり、関西本線芝山トンネルや道明寺線第一溝橋、同第二溝橋には、全国的にも珍しいフランス積み煉瓦が見られる。また日本有数の地すべり地として知られる亀ノ瀬地すべりとそれに伴う関西本線の付替え工事など、鉄道史的にも、また土木史的にも興味深いスポットである。

今回の見学会は、13時より柏原市立歴史資料館で行われ、柏原市教育委員会の石田成年氏より、平城宮から難波宮へと通じる行幸路として古くから知られた地であること、その頃から「懼坂」（おそれさか）と呼ばれ、亀ノ瀬地すべりの存在を暗示していたことなどが紹介された。また、亀

ノ瀬地すべりの発生と1932（昭和7）年の線路変更工事の経緯、現存する鉄道構造物とその特徴などについて、スライドを交えながら解説された。その後、JR西日本大阪支社のご協力により現地見学会を行い、筆者のガイドによって芝山トンネルを題材に土木構造物の見方・調べ方について簡単な解説を行ったほか、道明寺線の橋梁群を見学した。最後に、道明寺線大和川橋梁に立ち寄り、その前身である河陽鉄道の銘が入った英国コクレン社製のポーナル型プレートガーダーを見学し、17時頃散会した。

鉄道史学会は、どちらかと言えば文科系の方を中心に組織されているが、鉄道の歴史は土木技術の理解なくして語れない部分があり、土木史に対する関心も高まりつつある。また、研究内容によっては土木史に近いテーマや、アプローチもなされており、今回の見学会をきっかけとして土木史に対する理解がさらに深まることを期待したい。（鉄道総合技術研究所 小野田滋）



亀ノ瀬地すべりの鳥瞰図（昭和7年）

 学 会 の 動 き

土木史研究委員会報告

平成10年2月24日（火）、平成9年度第2回土木史研究委員会が開催された。また、委員会終了後には平成9年度第3回幹事会が開催され、委員会からの起案事項等についての議論がなされた。当日の主な事項は以下のとおりである。

□土木史研究編集小委員会からは、第18回研究発表会に関する論文の申込状況、審査結果、プログラム案についての報告があり、併せて開催校委員から準備状況について説明がなされた（開催案内参照）。また、発表会第1日目の昼食時、昨年同様に「ランチオンミーティング」を開催することが提案され承認された。

□理事会から各委員会に対して、内規制定の徹底に関する要望が出されていることを受けて、「土木史研究委員会運営内規」改正に関する素案が提出され、意見交換が行われた。主な改正点としては、委員の選出方法の明確化、小委員会の設立に関する事項等である。

□次回の全国大会においても、引き続き「近代土木遺産」に関する共通セッションを開催するとともに、研究討論会については、開催地（神戸）に関係の深いテーマを設定して、開催することが承認された。

第18回土木史研究発表会の開催

土木史研究委員会（委員長：榛澤芳雄・日本大学教授）では、下記要領にて第18回土木史研究発表会を開催いたします。また、6月10日（水）に見学会を企画しておりますので、多数の方々のご参加をお待ちしております。

1. 主催：土木学会（担当：土木史研究委員会）
2. 期日：1998年6月11日（木）～12日（金）
3. 会場：熊本大学工学部
（熊本市黒髪2-39-1、Tel.096-342-3531）
4. 参加方法：参加自由（無料）、
論文集「土木史研究」は実費配布
5. 懇親会：
 - ① 日時：1998年6月11日（木）18：00～
 - ② 会場：熊本大学工学部内
（詳細は当日会場にてお知らせいたします。）
 - ③ 参加費：3,000円程度を予定
 - ④ 参加方法：当日会場にてお申し込み下さい
6. 見学会：
 - ① 期 日：1998年6月10日（水）
 - ② 集合場所時間：熊本市内3ヶ所（熊本駅12時出発（マイクロバス）、交通センター（12：20分頃）、熊本県庁（12：40頃）の予定）
 - ③ コース：八代・人吉地方（郡築樋門、肥薩線沿いのトンネル・橋梁）
 - ④ 参加方法：「見学会参加希望」と題記し、氏名、勤務先所属、連絡先住所・電話・Fax番号を明記し、5月15日（金）までに次あてお申し込み下さい。
熊本大学工学部環境システム工学科
山尾敏孝
（〒860-8555 熊本大学、FAX.096-342-3507）
- ※詳しい集合場所、コース等については、お申し込み後にご連絡いたします。
7. 「肥後・熊本の土木史」展の開催

- ① 主催：土木学会西部支部「土木の日」
熊本実行委員会
- ② 共催：熊本博物館
- ③ 後援：土木学会土木史研究委員会、
建設省九州地方建設局熊本工事事務所、
熊本県土木部、熊本市建設局（予定）
- ④ 期日：1998年6月11日（木）～14日（日）
- ⑤ 会場：熊本博物館特別展示室
（熊本市古京町3-2）
- ⑥ 内容：展示会
 - (1) 白川の河川史
 - (2) 肥後の石橋
 - (3) 高田雪太郎関係資料
 - (4) 熊本の近代土木遺産
 - (5) 三角西港
 - (6) 熊本の道とその未来
- ⑦ 問合先：

土木学会西部支部平成9年度「土木の日」熊本実行委員会「肥後・熊本の土木史」展 委員 小林一郎
（熊本大学工学部環境システム工学科
〒860-8555 熊本大学、FAX.096-342-3507）
8. 論文集「土木史研究18」**事前販売**のお知らせ
発表会当日の議論をより活性化することを主たる目的として、本年より発表会開催前に、論文集「土木史研究」（4月末発行予定）を販売致します。ご希望の方はFAXにて、「住所、氏名、連絡先（〒、住所、所属名、TEL）、購入部数、支払方法」を明記の上、下記あてお申し込みください。なお、論文集は1冊6,000円（＋送料740円）です。
申込先：土木学会土木史研究委員会まで
FAX：03-5379-0125
申込締切：1998年5月22日（金）着分まで
9. 発表会プログラム（予定）
※プログラムは2月末時点のものでありますので、発表会当日のものとは異なる場合があります。

第18回土木史研究発表会のプログラム

6月11日（木）			
時間	第1会場	第2会場	第3会場
9:30		開会挨拶 土木史研究委員会委員長 榛澤芳雄	
9:40		【土木史一般】 榛澤芳雄	【鉄道・軌道】 青木栄一
		3. 災害復旧費国庫補助制度の制定に至る 史的考察 市川紀一（中部九州道路メツス） [高橋和雄]	6. Economic Context and Early Management of the Saint-Etienne & Lyon Railway Company Michel COTTE 小林一郎 [為国孝敏]
		29. 江戸樋橋切組定請負制度に関する 一考察 篠田哲昭（北海道建設工専）中尾 務	42. 旧鉄道路線・湧別線の路線計画と比較線の建設効果 横平 弘（道都大）
11:50		30. 国史大辞典に見る土木史用語に関する調査 知野泰明（日大）藤田龍之	43. 鉄道建設における総花的予算配分による 損失額試算に関する一考察 小池則満（名工大）横平 弘 山本幸司
		31. 社会資本にみる公共性の概念と変遷 吉原不二江（エース）	44. 鉄道開業による舟運の衰退過程に関する 一考察 鈴木盛明（足工大）福島二郎 [為国孝敏] 中川三朗
		32. 主としてリモートセンシングから見た 古代遺跡の土木技術的検討 後藤恵之助（長崎大）全 炳徳 前川芳秀	

学 会 の 動 き

第18回土木史研究発表会のプログラム

6月11日(木)			
13:00	【熊本1】]]]]]] 新谷洋二	【橋梁・構造物】 藤井郁夫	【都市・地域計画】 中川三朗
	1. 熊本・白川における橋梁変遷史 戸塚誠司(熊本大院) 小林一郎(山本 宏)	4. フランスにおける石造アーチ橋の 歴史的変遷と 橋梁美 山下真樹(熊本大院) 小林一郎[馬場俊介]	7. 明治期の神戸における市街地整備手法の 成立に至る考察 小原啓司
	20. 熊本の代表的な近代土木遺産と 地域特性について 山尾敏孝(熊本大)	5. 近・現代の中国における石アーチ橋と その係累 韓 直林(名古屋大) 馬場俊介[五十畑弘]	8. 震災復興橋詰広場計画の経緯と成立 ー旧東京市日本橋区および京橋区を ケーススタディーとしてー 伊東孝祐(国土開発技術センター) 秋山哲明 伊東 孝 溝口秀勝[篠原 修]
	21. 熊本地震(1889)について 秋吉]]卓(熊本大) 淵田邦彦	34. 石造アーチ橋・西田橋の移設復元方針 長谷場良二(鹿児島県) 島根佳彦[吉原] 進	9. 日本統治下の台北城内の街区形成に 関する研究 五島 寧(横浜市港湾局) [岸井隆幸]
	22. 三角港湾環境整備事業について 伊藤]]彰(熊本県)	35. 西日本石造文化圏における「巻石」構造物ー岡山県を中心とした実態調査 樋口輝久(岡山大) 馬場俊介	45. 近代の東京近郊における都市の変容と 運輸形態に関する一考察 福島三朗(足工大) 為国孝敏[中川三朗]
15:10	23. 白川の河川史に関する研究 田上敏博(建設省熊本工事事務所) 上村雅文	36. 岐阜県大野郡の尾神橋(尾神郷大橋)について ー日本道路公団高橋脚設計要領の由来ー 山根]]巖(大日コンサルタント)	
	24. 加藤清正の治水・利水工法に関する一考察 大本照憲(熊本大)		
	【熊本2・人物史】五十嵐日出夫	【橋梁】 小西純一	【都市】 渡辺貴介
15:20	25. 試論: 総合土木技術者(ゼネラリスト) 岩永三(五郎 伊東)]孝(日大)	37. 日本の鋼(鉄)橋製作工場について ー明治期ー 藤井郁夫(東京鐵骨橋梁)	46. 城と城下町の建設・形成過程における 水辺空間との関わり合いに関する研究 吉田]充(日大院) 新谷洋二
	26. 明治初期のエンジニア教育機関と熊本出身のエンジニア 市川紀一(中部九州道路メンテナンス)	38. 近世の橋脚杭の施工法について 松村]]博(大阪市都市工学情報センター)	47. 歴史的都市情報の電子メディアに見る 保存とその活用 野見山哲典(北九州市) 岡林隆敏[堀] 友義
	2. 札幌農学校の土木工学教育に関する研究 原口征人(北大院) 今]尚之[佐藤馨一[橋澤芳雄]	39. 西田橋基礎の地震応答シミュレーション ー沖積地盤上の石造アーチ橋の移設計画ー 福武毅芳(大崎総合研究所) 長谷場良二] 山口弘信 竹脇尚[信] 吉原] 進	10. 明治・大正期の道路占用物制度にみる 電柱立国の原点 鈴木悦朗(日大) 三浦裕二[西 淳二]
17:30	27. 関東地方の煉瓦造水門建設史 ー土木技師笠井愛次郎と井上二郎ー 是永定美(日大)	40. わが国の近代鋼橋梁に関する 画像データベースのCD-ROM化 北村潤一(長崎大院) 岡林隆敏[小西純一] 西森英海	11. 戦前の道路事業 ーその政策面を中心にー 松浦茂樹(建設大) [武部健一]
	28. 電力土木の歴史 ー第2編] 電力土木人物史(その6) 稲松敏夫(稲松技術センター)	41. 岐阜県の小里川発電所と与運橋 ー大正期の堅固な石造水力発電施設群ー 山根]]巖(大日コンサルタント) 井上]肇[松島秀夫	48. 明治23年「宮崎県仮定県道宮崎福島線」 道路改良工事の土木史的意義 藤本] 廣(宮崎大) 中澤隆雄[瀬崎満弘]

6月12日(金)			
9:00	第1会場	第2会場	第3会場
	【石垣】]]] 西田一彦	【近代土木遺産】 山尾敏孝	【河川1】 市川紀一
		14. 新潟地方の史的庭園形成における地域性に関する調査研究 土沼隆雄(新潟大院) 進士五十八[北村真一]	16. 堤防の自主決壊による氾濫水の河道還元に関する研究 大熊 孝(新潟大) [末次忠司]
	9:50	53. 神奈川県内(横浜市を除く)の 近代土木遺産調査について 昌子住江(関東学院大) 増淵文男	17. 放水路の放流形態と開発史に関する研究 岩屋隆夫(東京都労働経済局) [山本晃一]
	12. 石垣の安定性に関する各種の判定手法の 比較検討 田中邦熙(第一コンサルティング) 新谷洋二] 山田清臣 [小野田滋]	54. 近代土木遺産の保存・利活用に関する研究ー横浜市を事例としてー 水嶋]聡(日大院) 伊東] 孝	18. 治山治水のための森林保護と竹蛇籠に 関する研究 ー加賀藩の林制ー 安達 實(金沢大院) 後迫政道[知野泰明]
11:00	49. 石垣断面解析にFEMを適用するための 問詰部の考え方と解析事例 田中邦熙(第一コンサルティング) 新谷洋二] 山田清臣	55. 隅田川における防潮堤の建設史 望月]]崇(飛鳥建設) 島]正之[篠田] 裕	19. 歴史的曲線斜め堰の線形に関する 実験的研究 大年邦雄(高知大) 松田誠祐[篠 和夫] 清水敦史
		56. 山梨県における近代土木遺産 石井敬康(山梨大) 正岡和繁[東孝次郎] 北村真一	
	【城・上水】 佐藤馨一	【ダム・港湾】 山本]]宏	【河川2】 竹林征三
11:10	50. 城郭の立体的構成と規模に関する基礎的研究 赤見将也(日大院) 新谷洋二	15. 近代古典コンクリートダムの デザインに関する考察 ー佐藤藤次郎が設計・指導したダムを 対象にー 池田大樹(大日コンサルタント) 篠原 修[窪田陽一]	61. 治水経済史 ー水害統計及び治水経済調査手法の変遷ー 末次忠司(建設省土研)
	51. 旧江戸城石垣の崩壊および復旧工事に 関する研究 ー関東大震災復興期を中心にしてー 岡松泰弘(日大院) 新谷洋二	57. 庄川小牧ダム建設と流木問題 安達 實(金沢大院) 髭本裕昌[北浦] 勝	62. 古写真に見る河川土木と現在のピオトープづくりの比較 後藤恵之助(長崎大) 亀谷一郎
	52. 仙台城址御裏林の現況調査について 松山正将(東北工大) 花淵健一] 菊地清文[佐伯吉勝] 高橋則雄	58. コンクリートダムにみる戦前の ダム施工技術 松浦茂樹(建設大)	63. 多摩川の河川生態環境の変遷 ー永田地区を中心としてー 知花武佳(東大院) 松崎浩憲[玉井信行]
	13. 享保七年江戸四上水廃止の研究 神吉和夫(神戸大) [藤龍龍之]	59. 創生期における若松港・洞海湾の開発に関する史的研究 田中邦博(九州共立大) 長弘雄次[香月隆志]	64. 1956・1958・1959年の台風による紀の川の洪水特性 寒川典昭(信州大) 小池一臣[西 知哉]
		60. 大正9年の東京大規模築港計画(基礎案) 寺中啓一郎(日大) 大野克也	65. 河頭太鼓橋をとりまく土木遺構と治水 上野敏孝(鹿児島県) 北島清仁
閉会挨拶 土木史研究委員会副委員長 大熊] 孝			

第五回 河村瑞賢墳墓平成保存会会合

日 時：平成10年6月16日（火）（299年命日）
午前9時半より

場 所：鎌倉市山ノ内「建長寺」境内
河村瑞賢墓前にて

参加費：3,000円

－ 式次第 －

1. 瑞賢忌（河村瑞賢墓前）
2. 講演等（建長寺紫閣）

河村瑞賢と建長寺 三浦勝男
各地における瑞賢研究 宮村 忠
没後300年記念事業について 高橋 裕

3. 昼食会 けんちん汁（於・紫雲閣）
4. お茶会 茶道宗偏流（於・建長寺竜王殿）

連絡先：建長寺 0467-22-0981（代）

なお、河村瑞賢墳墓平成保存会は、建長寺境内にある墓・碑を整備・保存し、その業績を伝えることを目的とする会で、平成5年11月に設立された。会長は内藤幸穂関東学院理事長。

土 木 史 関 係 図 書

『技術官僚の政治参画』

明治の日本技術官僚がお雇い外国人には破格の高給を払いながらも、決して政策決定には参画させなかったこと、したがってその後の技術官僚が永らく同じ処遇に甘んじなければならなかったことが、本書の冒頭で語られている。

その技術官僚の地位向上の戦いが中心に宮本武之輔はじめシヴィル・エンジニアがいたとして、著者は「土木工学こそは、近代工学の始祖であるとともに、あらゆる個別工学を統合する科学であ

る」として古市公威の言葉を引用する。

教育社会学者のこの研究は、土木史の立場からも大いに啓発されるものを持つ。

書 名 『技術官僚の政治参画』

著 者 大淀 昇一

発行所 中央公論社 1997年10月

定 価 710円＋税

ISBN 4-12-101382-4

編集後記：土木史フォーラムでは、内容のさらなる充実を図るために、次号より、土木史フォーラム常任委員として、藤井三樹夫氏（水環境研究所）、小野田滋氏（鉄道総合技術研究所）、伊東孝祐氏（国土開発技術研究センター）、久保田稔男氏（国立科学博物館）の4名を新戦力として迎えることになりました。今後とも、皆様の暖かいご支援をいただけるよう頑張りますので、よろしくお願いいたします。

第7号土木史フォーラムで産業考古学会の住所を旧住所のまま掲載してしまいました。深くお詫び申し上げます。

産業考古学会の連絡先：〒101-0065 東京都千代田区西神田2-3-5

千栄ビル プラス・ワン気付 Tel & Fax 03-3234-3118（電話対応は火・金）

土木学会土木史研究委員会監修
土木史フォーラム No.8
発行者 土木史フォーラム小委員会
代表者 武部健一
事務局 日本大学理工学部 小山茂
〒274 船橋市習志野台7-24-1
TEL 0474-69-5219/FAX 0474-69-2581
E-mail: koyama@trpt.cst.nihon-u.ac.jp

CONTENTS

- NEWS

Remain of sewer of Edo era found.

- FORUM

For the people, for the public and civil engineering.

(NAGAO Yoshimi)

- LOCAL NEWS

Traditional houses on streets registered in Muroto city, Kochi.

Historical masonry bridge and water tunnel in Kagoshima city, Kagoshima.

- OVERSEAS NEWS

Visit to bridges in UK.

- OTHER INSTITUTIONS

Excursion of railway heritage in Kashiwabara city, Osaka.

- REPORT FROM CHSCE (Committee on Historical Studies in Civil Engineering)

Committee report.

Guide and program of 18th conference of CHSCE.

- WHAT'S ON

5th annual meeting of Kawamura Zuiken Society.

- BOOK GUIDE

"Techono-Bureaucrat and Politics"